

産学連携のリアル

(連載第8回)

マクスウェル国際特許事務所
弁理士 加島 広基

近年、大学等の研究教育機関における研究成果等の「知」を民間企業が活用し、新技術の研究開発や新事業の創出を図ることを目的として、産学連携の動きが加速している。また、首相官邸が設置する日本経済再生本部が出した「日本再興戦略2016」によれば、2025年度までに大学・国立研究開発法人等に対する企業の投資額の目標を現在の3倍とすることが挙げられている。

このように、最近では産学連携の推進を求める動きが活発になっているものの、両者の元々の常識や文化が大きく異なっていたため、必ずしも産学連携で大きな成果を生み出すことができない場合もある。とりわけ、知財面において両者の立場に大きな食い違いが生じるケースが多々見受けられる。

本連載では、産学連携の最前線に携わっている、研究教育機関側の立場の方および企業側の立場の方に交互にインタビューを行い、とりわけ知財面での問題やその解決手段についてリアルな声を聞くことにより、産学連携を成功させるヒントを探っていきたい。

連載第8回では、大学発ベンチャーであるPicoCELA株式会社代表取締役社長の古川浩氏に、大学および企業にそれぞれ在籍した経験に基づく両者の文化やマインドの差について話をうかがった。

九州大学から飛び出したベンチャー企業

—— 古川さんはNEC株式会社の技術者から九州大学の教員に転職し、その後にPicoCELA社を創業されたと伺いました。どうして企業から大学に移られたのか、そして大学の教職時代にベンチャー企業を立ち上げようとしたのか経緯をお聞かせください。

古川 私は元々学部新卒で企業に就職する予定でしたが、学生時代は論文を書くのが面白くて面白くて、学部を卒業するときに「大学に残って博士にならないか」というお誘いをいただいたこともあり卒業直前に内定を断って大学に残りました。そして、4年半ほど大学で助手をしましたが、元々は民間企業で働きたいという思いもありましたので、博士号を取れる目処が立った段階で大学を辞めてNECに就職しました。NECではネットワーク研究所で携帯電話の規格の標準化の研究をしていましたが、当時どうしてもやりたいことがあり、NECでは自分がやりたいこ



（PicoCELA株式会社代表取締役社長 古川浩氏）

とをやるのが難しいので公募で九州大学に移りました。昨年（2018年）まで15年間九州大学で働いて、その途中で2008年にPicoCELA社を立ち上げて大学と企業を兼業していたのですが、今は九州大学を退職してPicoCELA社の経営に100%コミットするようになりました。

—— NECの在籍中にどうしてもやりたいことがあったとおっしゃいましたが、具体的にはどのようなことだったのでしょうか。

古川 NECに在籍した頃は、携帯電話の第3世代移動通信システムの標準化を行っていた時期でして、2000年に日本が世界で初めてこの規格の商業サービスを始めました。その当時は日本経済はバブル崩壊はあったものの通信技術は世界でトップクラスでして、日米欧の3極が世界標準を決めようと競っていました。アメリカに対抗して日本とヨーロッパが組んで規格の標準化を行ったのですが、それが今の4GやLTEとなって世界のグローバルスタンダードになったわけです。このような環境の中で自分の若い頃の技術を研鑽できたのは本当に良かったと思います。ただ一方で、携帯電話のこのようなあり方というのは、ちょっと私自身の中ではどうかなという気持ちもありました。例えば周波数について、国や国際的な機関が割当を決めていたのですが、技術が進化すれば周波数のあり方も変わってくるのではないかと考えていました。そのときに、私がいた研究所の隣で研究していた技術がWi-Fiだったんですね。Wi-Fiは周波数ライセンスがいらないということに大きな衝撃を受けました。また、NECのネットワーク研究所ではインターネットについても研究を進めていましたが、フリーで広がっているオープンソースを組み合わせることにより世界の様々な技術を享受することができるという点で将来性を感じました。そして、